

教育者増子としての人格形成過程

松本 晴子¹

宮城女学校で教養と聖書を通しての人間の生き方を学んだ後、各方面で活躍した女性は数多く存在する。本稿は、その一人である増子としが、宮城女学校卒業後、幼児教育者としての知識と技能を習得するためにどこでどのような勉学を積んだのかについて考察したものである。

増子としは、現在でも幼稚園や保育園などで卒園シーズンに歌われることの多い楽曲《思い出のアルバム》の作詞者である。1998年度の宮城学院女子大学大学祭企画『宮城学院の文人展』では、増子としの生涯の概観とともに楽曲《思い出のアルバム》誕生のいきさつを紹介している。

本稿では『宮城学院の文人展』では確認しきれていない増子としの生涯と宮城女学校卒業後の研鑽を明らかにすることを目的とし、遺族への聞き取り調査と宮城学院資料室の文献、先行研究などをともに検討した。

その結果、増子としが宮城女学校卒業後に学んだ教育とそこで受けた影響によって、幼児教育者ならびに幼児音楽教育者としての人格形成がなされていったことを指摘した。

Keywords : 宮城女学校、頌栄、ハウ、カリキュラム

1. はじめに

本稿の目的は、増子とし（以下とし）研究の一環として、としの宮城女学校時代について概観し、宮城女学校卒業後、幼児教育者としての知識と技能を習得するためにどのような勉学を積み、幼児音楽教育指導者として優れた力を発揮していくことになるのかについて明らかにすることである。研究にあたっては、としの娘である吉野トキ子氏¹⁾（以下吉野氏）への聞き取り調査と宮城学院資料室と同窓会の資料、高野勝夫の先行研究²⁾、『幼児教育の系譜と頌栄』³⁾、頌栄の記念誌⁴⁾などの文献を用いることとした。

2. 宮城女学校から宮城学院へ

宮城女学校は、1886（明治19）年の創立であるが、時代とともに学則を改正しながら歩んできている。たとえば、創立当時の宮城女学校には、予科（3年制）と本科（4年制）が存在した。予科は1910（明治43）年8月まで続くがその後廃止される。本科は1898（明治31）年11月には4年

制から5年制に変更する。その後、1913（大正2）年5月には、予科と本科が統一され、名称が宮城女学校高等女学科（5年制）と変わった。この宮城女学校高等女学科は1913（大正2）年5月から、1931（昭和6）年3月までの17年間続いている。

さらに1931（昭和6）年4月から1943（昭和18）年3月までの11年間は宮城女学校高等女学部（5年制）と名称が変更している。

このように名称も若干変化しながら、宮城女学校は歴史と伝統を刻んできている。宮城女学校卒業という卒業証書を授与された年代は、1886（明治19）年から1943（昭和18）年3月までに在籍した学生たちであることはおさえておきたい。

それ以降、1943（昭和18）年4月からは、宮城高等女学校、1946（昭和21）年7月からは宮城学院高等女学校と名称が変わり、現在の宮城学院中学校は1947（昭和22）年4月から、宮城学院高等学校は1948（昭和23）年から今日まで継続している。

本稿で取り上げるとしは、1921（大正10）年4月、宮城女学校高等女学科に入学し1926（大正15）年3月に卒業している。宮城女学校第34回卒業生

1. 宮城学院女子大学教育学部

である。この頃はファウスト校長⁵⁾の時代で、英文専攻科では土井晩翠⁶⁾が教鞭をとっていた。ほぼ同世代には彼の次女土井照子(第31回卒業)、三女土井信子(第33回卒業)が、少し先輩には畠山千代子(第28回卒業)⁷⁾が在籍していた。このような先輩たちと、としの直接的な交流の形跡を確認する資料は認めることができなかったが、学内の文学会誌「橄欖」や「文芸会」⁸⁾を通して影響を受けていたことは十分に推察できる。

2. としの成長を支えた家庭環境とその時代

としは、1908(明治41)年2月3日宮城県名取郡沖野に、丹野安五郎・りょう夫妻の四女として誕生した。兄弟は四男五女⁹⁾だったことから、兄姉の影響を受けながら成長したであろうことが推測される。父親は沖野小学校の校長を務めた人物で、すぐ上の姉は東京の小学校教員として小川町小学校などに勤務した。教育者が家族にいたことも、としに影響を与えているといえよう。

としは、13歳の時に宮城女学校高等女学科(5年制)に入学し、18歳で卒業する。成長期の多感な時期に5年間宮城女学校で学んだ。としが幼少期、成長期を過ごした大正時代は、一般的に大正デモクラシーともいわれるように政治、社会、文化などにおいて自由主義的な運動が起こり、また女性が一揆を起し女性には社会を動かす力があるということが社会に認識されるようになってきた時代である。¹⁰⁾女性の自立、職業婦人が認知されるようになってきた時代である。

しかし、女学校に入学し学ぶことができた女性は相対的に家庭環境の恵まれた子女であり、さらに女性が職業婦人として働くことを認めていた家庭はそれほど多くはなかった時代でもある。としの両親は、民主的な教育観、人生観をもち、としや娘たちに教育の機会を与えていたことは、女性の自立を尊重する進歩的な家庭であったということが推測できる。

としは宮城女学校卒業と同時に1926(大正15)年4月に、神戸の頌栄保姆伝習所(以下頌栄)に推薦されて入学することとなった¹¹⁾。

3. 頌栄と保育の専門家エ・エル・ハウ

としは、宮城女学校高等女学科を卒業し、頌栄に進学した。頌栄はこの当時、我が国最初の2年生の専門的保育者養成機関で、キリスト教主義保育者養成機関のモデルとなる学校であった¹²⁾。としが頌栄においてもっとも影響を受けたのが、エ・エル・ハウ(以下ハウ)の教育である¹³⁾。

頌栄の設立は1886(明治19)年に神戸基督教会婦人会のメンバーによって、キリスト教主義幼稚園を開設しようとする動きが持ち上がったことが発端となっている。神戸基督教婦人会のメンバーは、幼稚園開設を実現させるため、資金つくり懸命であった。月一銭以上の積立金を出しあい千円を貯めたり、ひな人形が当時「ミカド人形」として米国に輸出されて評判が良かったことから「めいめいが三銭ずつ出しあって、それで小ぎれを買い、ひまひまに人形の着物を縫い、京都より人形を仕入れてこれに着せ、雛人形を作った」¹⁴⁾りなど、精力的に行動した。

日本ではまだ、幼児を一人の人格として尊重しようとする思想はなかった時代であり、幼稚園という名前も定着していない時期のことである。婦人たちがいわば草の根運動のように自分たちの力を結集して資金作りに奔走したことは画期的なことであり、熱意をうかがい知ることができる。

その実現のためには、中心となる指導者が必要であるという強い願いを持ち、アメリカから人格、識見ともにすぐれた保育の専門家ハウを迎えることとなる。教会の婦人会の人々は幼稚園開設のことしか考えていなかったのだが、ハウは日本の保育界の将来のために、保育者の養成が急務であると信じ、幼稚園開設と同時に教育機関としての頌栄の設立に着手した。そして、日本最初のキリスト教主義による頌栄を1889(明治22)年に開校したのである。それは幼稚園開園の二週間前であった。

ハウは1887(明治20)年、35歳の時に来日し、1927(昭和2)年、75歳で引退帰国するまでの40年間、頌栄でキリスト教主義の幼児教育と保育者養成に尽力した。ハウはアメリカで音楽と保育の

専門教育を受け、9年間保育の実際経験を積んだ専門家であった。またシカゴのフレーベル協会保母伝習学校にも通いフレーベル主義を学んでおり、フレーベル主義を理解していた。

ハウは来日してから1889（明治22）年に頌栄が開校するまでの2年間、自身の日本語力の習得に努めながら、週2回は青年たちに英語指導を行ったり個人的に音楽レッスンを行ったりした。また神戸女学院では歌唱指導を、東京女子師範では保育学の講義を行った。

ハウがもたらした功績を本稿では次の3つに集約したい。第1に、頌栄の学生に幼児の自己活動を重んじたフレーベル主義保育を伝えるにあたって、フレーベルの著書『人間の教育』、『母の遊戯及育児歌上・下』などをテキストとして用いたことである。これは我が国に保育、幼児教育の専門書がほとんどなかった時代に画期的なことといえる。その講義方法は、通訳を介して行なわれ、学生はこれを筆記し要約して提出するという寺子屋方式ともいえる口伝と筆写であった¹⁵⁾。加えてこれらを翻訳し出版したことも功績である。①3巻からなる『人間ノ教育』の筆写本は1899（明治32年）に、②『人之教育』の印刷本は1909（明治42年）に、③『母の遊戯及育児歌上・下』は1897（明治30）年頌栄幼稚園より出版されている。これらは現在頌栄の図書館に保管されている。翻訳にあたっては挿絵も西洋のものから日本の風習、風土にあったものにするなど工夫されている¹⁶⁾。また作詞家大和田健樹や国学者であり牧師でもあった松山高吉、教え子らの協力を得て④『幼稚園唱歌』が1892（明治25）年今村謙吉によって発行され、⑤『クリスマス唱歌』1894（明治27）年と⑥『幼稚園唱歌続篇』1896（明治29）年は、今村謙吉発行で福音社によって発売されている。当時歌われていた唱歌の多くは文語体による限られたものであったことから、豊かな幼児音楽の表現活動にハウが大きな貢献をしたことが理解できる。ハウはフレーベルの著書を訳すよりも先に『幼稚園唱歌』、『クリスマス唱歌』を翻訳し出版していることも、音楽への造詣が深かった現れと考え

る。この他にもハウは自分が行った講義を⑦『保育学初歩』として1893（明治26）年に頌栄幼稚園出版、福音社で発行したり、その他数冊保育に関する文献を翻訳出版したりしているが、これはハウが頌栄だけでなく日本の幼児教育、保育界全体の進展を真に望んでいたことによる。

第2に、ハウは幼児教育のために保育者養成機関の理想を追求して、普通科2年間、高等科2年間という学則の整備を行い、それぞれのカリキュラムを作成したことである。このことについては第5章で詳しく述べたい。

第3に、1906（明治39）年に、JKU（Japan Kindergarten Union of Japan）の設立に尽力したことである。JKUについてはいくつかの先行研究が示されている¹⁷⁾が、本稿ではJKUそのものに言及するものではないことから、概要のみを記すこととする。この頃は頌栄に続いて、サザン・メソジスト派の広島女学校、メソジスト派の柳城保母伝習所、メソジスト・エписコパルの活水女学校保母師範科、カナディアン・エписコパルの梅花保母伝習所、バプティストの東京保母伝習所などが次々に設立された。宗派を超えたこれらの機関の統一理念の必要性をいち早く提唱していたのは東京彰栄女学校のロールマン女史であったが、ハウはその意を受けて行動を起こしたのである。

ハウはJKU初代の会長に任命され、日本全国のプロテスタントキリスト教主義幼稚園と保育者養成機関の統一連合の会として、毎年夏に軽井沢に集い研究協議会を行うこととした。その後JKUは、各地域に部会を設立し、世界幼稚園連盟（IKU）の支部として1940（昭和40）年まで活動し、日本のキリスト教主義幼稚園、保育界と日本の保育界全体の発達に大きな貢献をしていく。のちにこれが母体となって現在の日本キリスト教保育連盟が生まれた。

以上のようにハウは、キリスト教主義とフレーベルの理念に基づく幼児教育を日本全体に定着させようと熱意をもって保育者養成に取り組んだ。保育者を目指す学生には、フレーベル精神を定着させようとフレーベルの著書を翻訳し、重要な保

育関係の専門書も翻訳しそれぞれ出版した。そしてJKUという組織を設立し、同じ目的、理念を持つ保育者がよりよい教育、保育が実践できるように切磋琢磨する研修の機会を設けたのである。

4. 頌栄と宮城女学校

ところで、宮城女学校から頌栄に進んだ学生は、としが初めてではなく先輩が数人いたことが次の記述から示された。「私ども14人は大正11年に入学しましたが、14人のうち8人までが各地のミッション・スクールの出身者でした。函館の遺愛、仙台の宮城、金沢の北陸、東京の女子聖学院、大阪のウィルミナ、神戸女学院、姫路の日の本、松山女学校、それに上の級には仙台尚綱、ひとつ下の級には名古屋の金城、下関の梅光があり本当にミッション・スクール出品展覧会といった光景でした。」¹⁸⁾

1922(大正11)時点で「仙台の宮城」と記載されていることから、としが入学する1926(大正15)年以前にすでに、先輩が何人か頌栄で学んでいたことは明らかである。

1943(昭和18)年まで続く宮城女学校には、本科や高等女学校の上に専攻科として聖書科、家政科、英文科、音楽科は存在したが、幼児教育、保育にかかわる専攻科は設置されていなかった。このことから、各地で伝道や教育に励んでいた宣教師たちの情報交換などによって、頌栄の幼児教育者養成の教育内容の高さはキリスト教主義の教育界に伝わるようになり、全国から入学者が集まったのである。日本全国のプロテスタント諸教派のミッション・スクールの女学校は、頌栄の教育に信頼を抱き、幼児教育に関心を寄せ保育者になることを希望していた学生を推薦し、入学させたのではないだろうか。

なお、3節で述べたJKUの東北部会が1922(大正11)年に設立されていることから、としが頌栄に進学する頃は、宮城と神戸は宣教師などの交流が盛んだったことが推測でき、宮城女学校の教職員にも頌栄の教育内容やハウの優れた指導が伝わっていたと考える。

5. 頌栄の教育

日本における最初の保育者養成機関は、一ヶ年の保母練習科として1878(明治11)年の東京女子師範学校(現在のお茶の水女子大学)に設けられた。ただし小学校教員養成課程の本科生に同時に保育を履修させて、小学校教員と幼稚園保母の養成を兼ねるというもので、保育者養成は第二義的なものであった。

キリスト教主義の最初の保育者養成機関は、1884(明治17)年、東京の桜井女学校(現在の女子学院)に一ヶ年の幼稚保育科として設置された。しかし1886(明治19)年頃に廃止されている。

一方頌栄は1889(明治22)年の設立であり、東京女子師範学校と東京桜井女学校よりはあとに設立されたキリスト教主義の養成機関である。しかし、二年制の専門的な保育者養成機関としては我が国最初の機関で、明治から今日まで続いている保育者養成機関としても我が国ではもっとも古く、本年で130周年を向えようとする養成機関である。時代の移り変わりのなかで次々と保育者養成機関が誕生しても、変わることなくその歩みを続けてきているのは、ハウの教育理念と教育内容の独自性を受け継ぎ、充実した養成機関としての誇りと伝統を維持し続けていることによると考える。

ハウは周囲の状況に左右されることなく保育者養成の修業年限と教育課程の最善を追求した。普通科2年間、高等科2年間というものである。高等科設置は、明治時代には画期的なことであった。しかし入学者は少なく、1893(明治26)年に3名、1897(明治30)年に1名が入学したのみであった。高等科への入学生は少なく事実上廃止となった。その中で高等科出身の大和田文子はハウの右腕となって頌栄で教鞭をとり活躍した1人である。

その後もハウは養成課程の内容の充実を検討し続け、その年限の延長の3年制構想をうちだした。そのなかで検討しなければならないものはカリキュラムであるとして、幼児教育の理論と実際、心理学、科学、童話の話し方、絵の描き方、音楽の授業に十分な時間を確保するためには3年間を

要するという主張を1898（明治31）の『ミッション報告誌』のなかで述べている¹⁹⁾。

次に1893（明治26）年7月に制定されたカリキュラム（表1）と、としが頌栄で学んでいた1925（大正14）年当時のカリキュラム（表2）を比較検討することとする。

第1にあげられる特徴は、聖書の時間が表1、表2ともに時数が5時間から6時間制定されていることである。聖書を中心としたキリスト教に基づく精神の学びに力を入れていたことがわかる。表2には朝の礼拝の項目が明記されており、礼拝での学びも大切にされていたことが読み取れる。礼拝については表1には記されていないものの、設立当時から受け継がれていた柱のひとつではないかと推測する。

第2に、表1には音楽が7時間設けられ、表2には唱歌、器楽（オルガン）、オルガン練習が科目として設定されより具体的で充実したカリキュラムとなっている。表1の1893（明治26）年のカリキュラム作成文書には、「唱歌は、正確優美にして幼児の心情に和するに足るものを選びてこれを授く」「音楽は、楽器の使用に習熟せしむ²⁰⁾」と記してある。唱歌の技能とオルガンを練習すること、弾けるようになること、習熟することが重要

視されていたことは明らかである。

ハウのオルガン指導については次のような記録も記されている。「ハウ女史の二十番館は、きれいで立派なので、みな特別寮としてうらやましがった。しかし、入っているものには困ることもあった。というのは、下でオルガンの練習をしていて間違うと、女史が下りてきて注意したからであった。」²¹⁾ ハウは音楽技能を備えた保育者であることを重要視し、音楽の技術力、表現力を備えた保育者養成に力を注いでいたことが確認できる。おそらくこの当時これほど音楽教育に重きを置いて

表2. 1925（大正14）年版カリキュラム²³⁾

第 1 学 年					
1 学期		2 学期		3 学期	
11 週 (55 日)	時数	15 週 (75 日)	時数	10 週 (50 日)	時数
聖書 (イエス伝)	55	聖書 (イエス伝)	75	聖書 (書翰)	50
恩物	55	恩物	75	恩物	50
母の遊戯	55	開発的生活	75	幼稚園原理	50
フレール伝	31	談話	75	色の原理	50
児童性質研究	24	児童性質研究	35	遊戯	50
唱歌	55	唱歌	75	唱歌	50
器楽 (オルガン)	11	器楽 (オルガン)	15	器楽 (オルガン)	10
オルガン練習	55	オルガン練習	75	オルガン練習	50
図画	22	図画	30	図画	20
生花	11	生花	15	生花	10
朝の礼拝	55	朝の礼拝	75	朝の礼拝	50
合計	429	合計	620	合計	440

表1. 1893（明治26）年版カリキュラム²²⁾

	普 通 科					
	1 年	教科書	毎週時数	2 年	教科書	時数
修身		聖書及口授	6		聖書及口授	6
教育学				原理、応用幼稚園原則管理法等	口授	2
心理学	普通心理学 学 嬰 児 心 理 学	矢嶋氏普通心理学及口授	2			
理科	動物、植物、生理	理科読本及口授	4	動物、生理、衛生	理科読本及口授	4
保育学	理論		2	理論	口授	2
	応用 実習		2 10	応用 実習	口授	2 10
唱歌			4			4
音楽			7			7
作文	書牘文近代文		1	書牘文近代文		1
合計			38			38

第 2 学 年					
1 学期		2 学期		3 学期	
11 週 (55 日)	時数	15 週 (75 日)	時数	10 週 (50 日)	時数
聖書 (旧約書)	55	聖書 (旧約書)	75	聖書 (旧約書)	50
人間の教育	55	教育史	75	子供の問題	20
自然物研究	55	クリスマス贈物ニ関スル手工	75	西洋美術	12
心理学	55	心理学	75	心理学	9
唱歌	55	唱歌	75	唱歌	50
器楽 (オルガン)	11	器楽 (オルガン)	15	器楽 (オルガン)	10
オルガン練習	55	オルガン練習	75	オルガン練習	50
図画	22	図画	30	図画	20
生花	11	生花	15	生花	10
朝の礼拝	55	朝の礼拝	75	朝の礼拝	50
保育法実地練習	55	保育法実地練習	75	モンテッソーリー	50
				衛生学 子供伝染病池田医師 学校衛生横田医師 子供の食物安永医師	
合計	484	合計	660	合計	331

ていた保育者養成校は、日本には存在しなかったのではないだろうか。吉野氏が、としはピアノが上手であったと力説していたことは、この頌栄での学びの力が大きかったことによると考える。カリキュラムに明記され、かつハウのように音感に優れた熱心な教師が身近にいたことによって、学生は音楽の技能、表現力を確実に身につけることができたといえる。

第3に表2の1925（大正14）年のカリキュラムには「恩物」「母の遊戯」「フレーベル伝」「人間の教育」の科目が設定されており、フレーベルの二大著書といわれる『人之教育』と『母の遊戯及育児歌を教科書として用い、フレーベルの精神から学ぶことを大切にしていたことがわかる。

第4に心理学として表1には普通心理学、嬰兒心理学、表2には児童の性質研究が設定され、幼児の心身の発達を丁寧に学んでいたであろうことがわかる。さらに表2には、子供の問題という科目名があり、社会的視点からの学びも行っていただろう。

第5に表1では保育学の中に実習が見られ、表2では保育法実地練習という科目が設定されている。これはいわゆる幼稚園における実習科目であり、実習による学びが大切に位置づけられていることがわかる。

他にも表1では理科、表2では自然物研究が設定され、表2では図画、西洋美術の科目も設定されている。さらに表2では、生花という科目が設けられていることなどから、ハウを中心として頌栄の教師たちは、学生のニーズに応える科目、あるいは、保育者であると同時に女性として必要な力を備えることを考え抜き、カリキュラムを構築していったのであろうことが推測できる内容となっている。

頌栄が、明治中期から大正時代にこのような充実したカリキュラムを構想し、保育者養成に向き合っていた背景には、日本の幼児教育界、保育界に貢献する確実に力を備えた女性を数多く育てたいというハウを中心とする教師たちの強い意図と願いがあったことが読みとれる。その結果、本稿

で着目しているとしをはじめ、幼児教育の職に就いて活躍する人材を輩出していくことになったといえるのではないだろうか。

このカリキュラムで学んだ学生たちは、確実に保育者として生き抜くための多様な知識と技能を身に付け幼児教育界、保育界のリーダーとなる資質を備えていったと考える。

なお、としが宮城女学校の5年間で学んだカリキュラム²⁴⁾を見てみると、国語漢文、英語、歴史地理など一般科目の他に裁縫、家事などの科目が設置されている。音楽は毎週時数2時間で、国語漢文と英語が6時間、裁縫が4時間であったことからすると、音楽を特に多く学んだとは考えにくい。ただし、「音楽においては課外に学習するピアノ又はオルガン演奏の成績を一級より五級までとし高等女学科卒業の際修了証書を授与す」と欄外に記してあることから、課外に学習した学生がいたことは確かと思われる。としが課外に学習したかどうかは確認できなかったが、さらに手掛かりを探り明らかにしていきたい。

6. としの頌栄での学び

頌栄で学ぶ学生のほとんどは、寄宿舎生活を送っていたようである。これは「通学可能な学生は通学願いを出して許可を受けた」²⁵⁾という記述から読み取れる。としはどのような寄宿舎生活を過ごしたのだろうか。この寄宿舎生活は、人格的に成長する機会を設けようという教育理念の基に実践されていた。

寄宿舎生活は大変厳しく授業が朝7時に始まるので5時半に起床、掃除をして朝食後に登校していた。寄宿舎は学生の増加で3か所に分かれていた²⁶⁾が、食堂は最初に建てられた寄宿舎の1つだけであった。

午後4時に授業が終了すると、寄宿生は心身の鍛錬のため諏訪山に上り、帰宅し5時に夕食であった。6時半からおよそ15分ほどの礼拝があり、7時から9時近くまでが自習時間で、9時消灯であった。土曜日は外出や帰宅を許されたが、行き先や時間の届けは必須であった。日曜日は安息日

で、日曜学校でハウの聖書講義を聞いてから朝と夜は神戸基督教会に出席の義務があった。寄宿舎に帰ってからは面会も外出も禁じられ、寄宿生は本を読んだりして過ごしていた。

制約があり窮屈そうに感じられるが、学生はおおらかに寄宿舎生活を謳歌していた。たとえば、土曜日は学校が休みなので金曜日の夜は一週間の経験や考えを語り合ったり、コーラスをしたり、バザーのための作品作りをしたり楽しいひと時を過ごすこともあった。また食欲旺盛な学生は夜になるとおなかがすき、夜なきそば屋がくると抜け出して食べにいったりなどしていた。

多感な20歳前後の女学生たちは、楽しく充実した寮生活をとおして自立した女性に成長していったといえる。

7. おわりに

本稿は、増子とし研究の一環として、宮城女学校卒業後の頌栄でのとしの学びに注目し、検証を行ったものである。これは、「としが幾度となく頌栄での学び、特にハウからの影響が大きかったことを語っていた」という吉野氏の証言に基づいている。このことから、頌栄について理解し確認することは、教育者となっていく形成過程としてのとしの全体像および音楽教育観の考察を進めるうえで避けて通れないと判断した。

その結果、頌栄の教育は、指導者にハウを迎えたことによってキリスト教主義を根本にすえた教育、フレーベルの理念、精神の基本をとらえた教育、音楽技能に高い力量を備えた保育者養成という明確な目的を持った指導を行っていたことが確認された。としは、この頌栄での濃密な2年間の学びを得て、自立したキリスト教保育者として社会に貢献していくスタートを切ることになる。

としにとって頌栄での2年間の学びが、その後の幼児教育者、幼児音楽教育者としての道を拓いていく骨格となったのは明らかである。

今後は本稿の結果をふまえ、頌栄卒業後のとしの残した業績を整理し、本稿では迫り切れなかった箇所を補足しながら、増子としの教育観を明ら

かにしていきたい。

注

- 1) 吉野トキ子氏は、秋田県の生まれである。吉野氏がとしと出会ったいきさつは以下のようなものである。としは秋田県で講演を行った際、秋田県の教育長と面識を得た。当時寺の住職を兼ねていた教育長は、としの講演について講話のなかで語り、それを聞いた檀家の吉野氏の母が、娘が幼児教育に関心をもっていることを住職に伝えた。吉野氏は教育長の取り持つ縁で、としの家から千葉の聖徳短大に通学することになった。その後、吉野氏はとしと鐵哉氏に増子家の養女になってほしいと懇願され養女になった。(1998年度『宮城学院の文人展』の冊子には吉野氏は本学の同窓生と記載されているが、吉野氏への聞き取り調査によって正確な経過を確認できた。)
- 2) 高野の研究には、高野勝夫『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』頌栄短期大学、1973の著書の他、高野勝夫「A・L・ハウ女史の保育者養成の構想について」『日本保育学会大会研究発表論文抄録』26、1973、pp.111-112、高野勝夫他「エ・エル・ハウ女史の日本保育史への貢献—幼児音楽開拓者として—」『日本保育学会大会研究論文集』28、1975、pp.103-104などがある。
- 3) 高道基編著『幼児教育の系譜と頌栄』頌栄保育学院、1996
- 4) 『頌栄保育学院85周年記念誌』頌栄保育学院1974
- 5) ファウスト(アレン・クライン・ファウスト)は、1913(大正2)年に宮城女学校第6代校長に就任し、1930(昭和5)年まで17年間奉職している。この長期の在職は男性の歴代校長では初めてで、宮城女学校の発展に寄与した重要な人物の一人である。ファウストは、アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州の出身で、1900(明治33)年に東北学院の宣教師として来日したが、流暢な日本語から教授となり教会史や教育史、教育学、社会学の他、ギリシャ語とラテン語などの教鞭をとり東北学院にも貢献した。仙台の孤児院や盲学校などの経営を助け、結核予防など社会福祉事業の草分けとして活躍し政府から表彰されている(早坂禧吾『天にみ栄え』宮城学院、1987、pp.477-539。宮城学院

資料室『宮城学院資料室年報』、2003、p.61)

- 6) 土井晩翠は、仙台市生まれの英文学者、詩人。1915 (大正4) 年から1924 (大正13) 年12月まで宮城女学校英文専攻科で教鞭をとった。『天地有情』『晩鐘』など多くの詩集を発表している。学校校歌の作詞も数多く「宮城女学校」校歌の歌詞もその一つである。中学校音楽科歌唱共通教材曲「荒城の月」の作詞者である。
- 7) 畠山千代子は1902 (明治35) 年登米郡中田町の生まれで8歳の時に転倒し右腕を骨折した。治療が遅れ切断し義手となる。他の高等女学校では入学を断られ宮城女学校でも幾人かの教師が難色を示すが、ファウスト校長は入学を許可する。英語力に優れ「リア王」の主演を演じ快活な女性であった。宮城学院資料室「大正期の宮城女学校と畠山千代子」『宮城学院資料室年報』2003、pp.59-66
- 8) 「橄欖」の前身は「校報」で、宮城女学校職員、同窓会委員、学生及び校友の間の交流を深めるねらいで発刊された。「橄欖」の創刊号には英語教師であった土井晩翠が巻頭に詩を寄せている。「文芸会」は「文学会」を前身とし、文芸関係や運動部、研究発表など学生の活動状況が掲載された。たとえば、1921 (大正10) 年発行の「校報」第一号には英詩暗誦や文章朗読などの他に、土井照子、信子姉妹によるピアノ連弾が記されている (『天にみ栄え』 p.522)
- 9) 本研究を進めるにあたって、吉野氏が増子とりの本籍を確認くださり、四男五女であったことがわかった。(1998年度の「宮城学院の文人展」の冊子には四男四女と記載されている。)
- 10) 総合女性史研究会『史料にみる日本女性のあゆみ』2000、吉川弘文館 pp.156-164
- 11) 頌栄は現在も、頌栄短期大学として保育者養成に尽力している大学である。としは推薦されて頌栄に入学したことを吉野氏に話していたことが聞き取り調査からわかった。また頌栄保育学院85周年記念誌48ページには「私たち17回生のクラスは9名でしたが、宣教師の方や教師の推薦で入学したものばかりでした」という記述があることから、としが推薦で入学したことは確かなのではないかと考える。
- 12) 水野浩志「ハウ」『幼児保育小事典』日本図書センター、2014、p.182
- 13) 生前としては、ハウから大きな影響を受けたという話をよくしていたことが吉野氏への聞き取り調査からわかった。
- 14) 2) の著書と同書 p.6
- 15) 3) と同書 p.50
- 16) 4) と同書 pp.11-23
- 17) 4) と同書 p.37, p.41に記録されているが、その他の論考としては、清水陽子「キリスト教主義幼稚園普及におけるJ.K.Uの役割について」『日本保育学会大会研究論文集』41、1988、pp.664-665、永井優美「日本幼稚園連盟 (JKU) における保育者養成論：保育者の資質能力への共通理解の形成」『教育学研究年報』東京学芸大学教育学講座学校教育学分野・生涯教育学分野編33、2014、pp.107-122 などがある。
- 18) 4) と同書 p.68
- 19) 2) の著書と同書 pp.42-43
- 20) 3) と同書 p.59
- 21) 2) の著書と同書 p.187 及び 3) と同書.133
- 22) 2) の著書と同書 p.44、及び 4) と同書 pp.59-60
- 23) 2) の著書と同書 pp.219-220
- 24) 早坂禧吾『天にみ栄え』宮城学院、1987には明治期のカリキュラムは記されているが大正期は記されていない。大正9年1月に学則変更を届けた文書が宮城県公文書館に保管されていたことからそれを資料とした。
- 25) 3) と同書 p.132
- 26) 2) と同書 pp.186-187、及び3) と同書p.131によると第一寄宿舎は山本通5丁目9番地、その裏手に第二寄宿舎、隣接地に第三寄宿舎、それでも収容しきれない時は、ハウの居住する山手二十二番館があてられた。

謝辞

調査にご協力をいただいた吉野トキ子氏には深く感謝申し上げます。なお、本研究は平成30年度科学研究費助成事業 (基盤研究(C) 課題番号18K02678) による研究成果の一部である。